

人権保育専門講座 2

# 保育のなかの私

～気づく みつめる ふり返る 解放する～

西原 美保子 さん（常磐会短期大学）

人権保育専門講座 2 は、常磐会短期大学の西原美保子さんに、「保育のなかの私 ～気づく みつめる ふり返る 解放する～」と題して、松阪、伊勢、名張の 3 会場でご講演いただき、86 名の方にご参加いただきました。

西原さんには、園での子どもたちの姿から学んでこられたことや、出会ってきた子どもや保護者に気づかされたことなどを、ご自身の保育経験にもとづく具体的な事実でお話いただきました。

まず、西原さんは、園で取り組まれてきた「あそび」を紹介され、参加者とともにあそぶことをとおして、会場全体にリラックスした雰囲気を作り出されました。

## 「変身ゲーム」

「私をよくみてください」



「さて、どこがかわったでしょうか？」



答えは、

①めがね ②ネックレス ③ハンカチ ④フローチ

でした。

このあそびから、保育のうえでも、私たちが人との関係を結んでいくうえでも、とても大切なことを学ぶことができます。

- ・子どもや保護者のささいな変化に気づく  
⇒ 注意深く相手を見つめる
  - ・気づいたことを相手に伝える  
⇒ 気づきを行動へ（思っているだけでは、相手には伝わらない）
- 思いや気もちを伝えあう  
⇒ 私たち自身のコミュニケーション力や人権感覚を研ぐ



子どもたちのコミュニケーション力を豊かにする保育をしようと思ったら、まず、自分たちが、子どもたちに、保護者の方に、そして、職員どうして、心地いい言葉をかけるということが大切です。

一人ひとりが、相手の立場になって、言ってもらってうれしい言葉を考えて、選び、その言葉を実際にかけるということを心がけていきましょう。

なぜ、こうした話をするのかというと、保育に携わる私たちは、保育者自身の価値観が子どもたちに大きな影響を与えるということを自覚しておく必要があると思うからです。

子どもたちの意欲を引き出し、何事も「やってみよう！」と挑戦する気もちを育むためには、子どもたちに「できることがいい。できないことはアカンこと」だという価値観をうえつけてしまわないように、「苦手なこと」や「できないこと」は決して「はずかしいことではない」というメッセージを届けていきたいと思うのです。

例えば、私は、意図的に「おとなも苦手なことやできないこと、いっぱいあるよ」と、子どもたちに、自分の苦手なことや失敗をみせるようにしてきました。

そして、子どもたちが、苦手なことやできないことであってもあきらめずに、友だちと色々なことを体験するなかで、「一緒にやってみよう」「〇〇ちゃんとやってみたら、できたわ」という実感を積み重ねていくようにしてきました。

### 【事例】

おしっこをもらしてしまうことがよくある、たくちゃん（仮名）という子がいました。たくちゃんに対して、冷やかしゃ「くさい」「手をつなぎたくない」というまわりの子どもたちの様子がみえてきます。私は、そうしたとき、機会をみつけて、意識的に「西原先生、おしっこちびつてもたわ」と言うようにします。

子どもたちは、先生が大好きだから、すごく心配してくれます。保育士が本当に困ったように、気持ち悪いということを伝えれば、冷やかす子はいません。「先生、私のパンツかしたるわ」「私の使って」と言ってくれます。

また、生活の何気ない場面で、「みんなは、おしっこちびったことない？」「ちびったとき、どんな気持ちやった？」と、おしっこで失敗したときのことを思い出させるような言葉かけをします。

そうすることで、「たくちゃんだけじゃない」「自分もちびること、ある」って、子どもたちは、たくちゃんの失敗を、自分と重ねて、みようとしていくのです。

また、失敗してしまった下着は洗えば気持ちよくなる、というところから、クラスみんなで洗濯あそびにつなげてきました。

## 私の同和保育、人権保育との出会いから

40年間、保育現場で、同和保育、人権保育に携わってきたなかで、「どういう場面で自分が気づき、自分自身が変わってきたのか」や「自分の保育実践を具体的にどう変えてきたのか」ということをお話したいと思います。

保育士になって15年くらい経ったころ、豊中市にある同和保育所に異動になりました。そのころ、豊中市にある2つの同和保育所に異動になった保育士たちには、「なんで私が…」と泣く人もいるくらい、明らかに同和保育所を「できれば避けて通りたい」という意識をもっている人たちがいました。私は、自分の異動が決まったとき、「同和保育所に異動になっても今まで自分がやってきた保育をやったらいだけやん」「なんで、そんなに嫌がるのかなあ」と思っていました。また、私は、「自分は差別してへんし、差別はおかしい」と思っているから、私のやっている保育は間違っていないと思っていました。そのころを振り返ると、結局、同和保育所への異動を構えていた自分がいたんだとわかったのです。

そして、実際に勤めて、保護者と話をするなかで、私は、自分を問われることがたくさんありました。そして、自分がこれまでやってきた保育が、「自分についてきてくれる子」を評価し、自分の保育に乗ってこない子を「あの子は、落ち着かない子」と、子どものせいにするものだったということです。私は、自分の都合のいいように自分の保育を解釈して、自己満足的な自信をもっていただけだったということに気づくことができました。また、私は正義の味方やから差別をしないところにいるんだという勘違いをしていました。

私は、この保育所で、子どもたちや保護者の姿、あるいは保護者や地域の人たちの思いや願いから部落問題と出会い、そうした出会いが、自分自身のことやいろんな人権問題の

ことを考えていくことにつながっていきました。

この保育所で出会った2人の保護者の話をします。

#### ひろみ（仮名）の父親との出会い

ひろみちゃんの父親は、被差別部落に生まれて、結婚のときには、相手の親から反対されるという差別を受けていました。相手の家族についても、結婚したことが原因で、きょうだいが離婚したり、親戚との関係が壊れたりしたそうです。その父親からは、私に「おれの命がこの世にあるというのは、アカンのかなあ」と言われたことがありました。そして、何回も死のうと思ったということも話してくれました。

子どもが生まれたときのことも話してくれました。看護師さんが「お父さん、抱いてあげて」と赤ちゃん（ひろみ）を連れてきてくれたとき、「この子、ほんまに生んでよかったのかなあ、俺と同じように差別されへんかなあ、結婚差別に遭わへんかなあと、いろいろ考えてしまって、そう考えたら、2、3秒やったかもしれやんけど、恐くて抱けなかったんや」と言われました。私は、ひろみちゃんが誕生したときの父親の思いを聞かせてもらい、わが子が生まれたときの自分や自分の周りの人たちの喜びと重ねて、「なんで、同じ命でありながらこんなふうにならなければならないのか」と、本当に差別を憎み、なくしたいと思うようになりました。「自分は差別してない」「差別はおかしい」とは思っていたけれど、この父親から「差別の現実」を聞かせてもらうなかで、差別に対する怒りを実感としてもつことができた場面でした。

#### しんや（仮名）の父親との出会い

しんやちゃんの両親は、在日韓国人の方でした。結婚差別を受け、父は自分の気持ちを閉じこめて生活していました。父親は、しんやちゃんのことを叩いたり、外へ出したりして、厳しい子育てをしていました。保育所では、しんやちゃんに理由はあるのですが、周りの子どもたちに手を出してしまうことが多くありました。周りの保護者からは「またしんやちゃんが泣かせた」という声をよく聞きました。保育所にお迎えに来たしんやちゃんの母親は、子どもの姿がまだ見えない所から泣き声が聞こえると、確かめずに「また、うちのしんやが誰かを泣かしたんや！」と下を向いて迎えにくる姿があったのです。子どもどうしのトラブルでしんやちゃんの父親と話をする、いつも父親は「しんやが周りの子に手を出すようなことあったら、先生、絶対止めてな」「韓国人はちゃんとしとかなあかんねん。正しくしてないと日本人から差別されるんやから」と言われていました。

この2人の子どもや親との出会いが、大きく私のそれまでの保育観を変え、自分が「自分の命」を大事だと思う保育、周りの家族や近くの人たちがここにある「この子の命」を大事だと思う保育をしていきたいと思うきっかけとなりました。

## 絵本の読み聞かせの取組

こうした出会いから、これまでの自分をふり返ったり見つめ直したりしていくなかで出会った、特に印象深い1冊の絵本があります。「ぼくはおおかみだ」という絵本です。(この本はもうすでに廃版になっています。)

### ぼくはおおかみだ

クロード・ブージョン 作 末松氷海子 訳



あるところに 自分がおおかみだということを知らない  
子どものおおかみがいました。

おおかみは、はえやちょうちょうがとびまわるのを見て  
いるのがとても好きでした。

畑や森にすむ動物たちとも、とてもなかよしでした。

けれども……。

子どものおおかみがだんだん大きくなってくると、なかまの動物たちは、へんな目つきで  
おおかみを見るようになりました。

日がくると、沼のほとりは、なんだかしんぱいそうなようすになります。

おおかみといちばんなかよしだったひつじまでが、とうとうこまった顔でいいました。

「だめなんだ。ぼくたち、もういっしょにあそべないよ」

ある晩、おおかみが沼のそばへやってくると、いつものなかまたちがおお声をあげて、に  
げだしました。

「もうこの沼で水をのむのはやめよう。ぼくたちだけのべつの場所をさがそうよ」

おおかみは水にうつった自分の顔をじっと見ました。

「ほんとうにぼくは、うさぎにもひつじにも、りすにもにてないや。ぼくの顔はなんにも  
しなくても、みんなをこわがらせる。だから、みんな、ぼくからにげていっちゃうんだ  
な。ようし。それなら、これからはわざとみんなをこわがらせてやるぞ」

そこでおおかみはきばをむきだして、おそろしいうなり声をあげました。

子ウサギたちはおびえました。

(以下、省略)

この本の読み聞かせをすると全然聞こうとせず、後ろの方であちこちしているしんやち  
ゃんでした。私は、この絵本から伝えたいこと、感じたことをなにも言いませんでした。

(以前だと私の思いを押しつかけたり、私の感じることを発言する子に対して「そうだね」

と評価していたのです) そしたら、子どものなかで「このおおかみ、しんやちゃんといっしょやなあ」「しんやみたいや」「おおかみおこらせたのまわりのどうぶつやん！」ってつぶやきが出てきました。また、「自分たちも、しんやのこと、こわいって決めつけてるよな」とか、「おかしいよな。うさぎだって、みんな顔違うのに、おおかみだけ違うとか、おおかみだけ大きくなって怖いとか、おかしいよな」っていうことを言います。子どもたちが素直にもつ感性に感動すら覚え、私はどれも否定しませんでした。

そうしたつぶやきを出発点にして、「このお話の続きをみんなで作ってみよう」と提案したら、子どもたちはいろんな意見を出し合って、「みんなでいっぱい遊ぼうぜ」という劇をつくっていきました。また、何度も繰り返して読んでいったなかでの子どもの様子やつぶやきを保護者の方にも伝えていくことを大事にしながら子どもの事を考えていく機会にしていきました。

## 人権の視点で子どもをとらえることが出発点

### 子どもを尊敬するということとは？

あるとき、0歳を担当した先生が、「Aちゃんはぬるめのミルクがすきなんやんな」「Bちゃんは熱めが好きやねん」「Cちゃんは、縦に抱くより横がいいんです」などと言いました。7か月の子がそんなこと言うたん？」と聞きました。言うわけないのです。でも、その先生は、「言葉では言わなくても、言うているんです」と言うんです。

例えば、ミルクを与えていると、舌で押しながら「いらんよ」「熱すぎるよ」とか主張をしています。

0歳の子どもであっても、意思をくみとることができます。おとなが決めるんじゃない。子どもが何を求めているのか、どうしてほしいのかを伝えているんだということをしっかりとらえていくことこそ、「ここにある命」を尊敬するということです。

保育者の言葉かけは、子どもたちの尊敬、反偏見の意識を育てることにつながっています。言葉かけは、保育者の意識の表れです。育てたい「尊敬」「公平」「反偏見」という人権保育の視点をまず自分たちがもっていなければいけないと思っています。

#### 【事例】

全盲のくにちゃん(仮名)という子どもがいました。B先生は安全面や友だちとの仲介役としてかかわっていました(支援担当です)。周りの子どもたちには、くにちゃんにはB先生がいるという見方をさせてしまっていました。くにちゃんが困ったことがあると、すぐに「B先生、くにちゃんが手痛い言うてるよ」等、呼ぶような状況でした。

そんなとき、クラス担任の二人の先生が私のところへきて、「先生、ちょっと劇をして子どもたちに見せたいんです」と言いに来ました。「なんの劇？」と聞くと、「昨日、遊戯室で、3人の子が棚から飛び降りて、座っているくにちゃんを突いて逃げたんです」そして、「くにちゃんに気づいていなくてしたのか、どんな思いでしたのかというのは確認していませんが、そんな姿があったので、子どもたちに考えさせたいんです」「西原先生は、くにちゃんの役をやってください」と言うんです。

劇は、スイカワりの設定でした。アイマスクをした私を、その二人の担任は蹴るわ、どつくわ。結構痛かったですよ。担任たちは、本気でせな子どもらに伝わらんとと思ったんでしょうね。それで、二人は、逃げます。それを見ていた子どもたちは、ほとんどの子が立ち上がって、「先生ら、何やってんねん」「西原先生、泣いてるやんか」「なんで逃げんねん。ひきょうなことすんなや」「謝れや」とか言い出します。

私は、アイマスクをとって、担任たちに抗議をする子どもたちの姿を見て、「すごいな」と思いました。そのなかで、「昨日、くにちゃんを突いた子たちは、この子たちだな」ということもわかりました。その子たちは、ずっと下を向いていました。

泣いている私のところに、くにちゃんが来ました。そして、両手をつないで、「西原先生、今、泣いているの？」と聞いてくれました。「うん、西原先生、今、涙出ているの」と返して、それから、私とくにちゃんの二人の世界のなかで、「ねえ、くにちゃんもこんな涙出ることある？」「こんな気持ちになったことある？」と聞くと、「うん、あるよ。昨日あったよ」と教えてくれました。

子どもたちがおかしいと思うことに声を挙げていく。そして、してしまった子どもたちがこの周りの子どもたちの姿から「あーしまったなあ」と気づいていく。私は、これが同和保育、人権保育だと思うのです。

その後、担任の先生たちは、15分くらいの少しの時間ですが、子どもたちが、毎日、交代でアイマスクをしてさまざまな活動をやってみる「こうもりあそび」という取組につなげていきました。所ではアイマスク体験についてはいろいろな意見もあり、議論をしました。でも、私は、「その取組の意図やねらいがあるのだから、やってみたら」と言いました。

やってみると、いろいろな子どもの反応がありました。「どうしたらいいの、わからない！」「トイレ行かれへん！」「こわい！」、いろいろです。

子どもたちがアイマスクをして不安がったとき、くにちゃんの出番でした。「なにになに、みほちゃん、トイレどこか、わからへんの？教えたろ、教えたろ」と、みほちゃんの腰をもって、誘導してくれます。くにちゃんは、保育所内の導線が分かっています。「スリッパはここやで」、トイレからもどってきたら、「タオルはここやで」と教えてくれます。くにちゃんがピカピカに輝いていく活動です。子どもたちがくにちゃんのことを信用して信用して、そして信頼していく活動です。くにちゃんが自分に自信をもって胸を張っていく活動になりました。

続けて、「こうもりさがし」という遊びをしました。黄色こうもりと黒こうもりを用意して、黄色こうもりは園内のあちこちに貼っておきます。黒こうもりは、見えるところにはありません。子どもたちは、4、5人のグループでかごをもってこうもりをさがします。次々と、たくさんの「黄色こうもりがみつかります。でも、なかなか黒こうもりは見つかりません。そのとき、くにちゃんが、「先生。先生は黒こうもりを知っていますか」と聞きました。「はい、くにちゃん、よく聞いてくれました。黒こうもりはわたしのおなかの中にあります」と言って、くにちゃんの手をとって黒こうもりを持たせ、グループにわたしました。そうすると、くにちゃんのグループの子は、「黒こうもりはだれかに聞くんか」と気づいていきます。そして、くにちゃんのグループは、黒こうもりをたくさん見つけることができました。そのグループの子どもたちは「くにちゃんがおったから、黒こうもりを見つけたことができた」と思っています。子どもたちは、目で見てさがすだけではなく、聞くということも大事なんや、ということを知っています。

10月。運動会でのリレーの取組です。くにちゃんももちろんいっしょに参加します。ふだんの園生活では、くにちゃんは、園庭で走ると、いろいろぶつかったりします。周りの子たちからは「くにちゃん、すごいで。ぼくやったら泣いてると思うけど、くにちゃんは、泣かずにまた走るんやで」そんな声も聞かれています。

でも、リレー競走となると、少しちがいます。練習で、くにちゃんのグループは負けてしまいます。子どもたちのなかからはいろいろな声が聞こえてきます。「くにちゃんは見えへんし、ゆっくりやし」「くにちゃんと一緒にグループは負けるからいやや」という声もあります。担任は、勝つためにはどうしたらいいかを子どもたちと考え合っています。そして、あるとき、「くにちゃんはトラック、半分でもいいやろ」「ゆかりちゃん（仮名）が、くにちゃんといっしょに走りな」といろいろ話していきます。そうしたとき、くにちゃんが発言します。「いや、ぼくは、みんなと同じようにトラック全部走りたい」。これが、くにちゃんが自分自身を尊敬している姿だと思います。でも、ぶつぶつと言う子もいました。伴走者は、みんなが言ったように、「ゆかりちゃんと走る！」とくにちゃんは言いました。

ゆかりちゃんは、週末になると、私のところへきて「タンバリンか鈴を貸してくれませんか？」と言いに来ました。「どうするの？」と聞くと、「日曜日にくにちゃんとかくにちゃんのお母さんたちと公園でリレーの練習をするんです」と言うのです。「どうぞどうぞ使ってくださいね」と言って、私はどちらも渡しました。

そして、運動会当日を迎えました。バトンをもらったくにちゃん。ゆかりちゃんとくにちゃんの間には確かなすばらしい信頼関係がみえました。本当に素敵なリレーの取組に、見ている方からたくさん拍手をいただいたのです。

## 最後に

差別の問題、人権問題を考えることが保育とどうつながるのか、ずっと考えてきました。

自分自身とどう重なるのかということもずっと考えてきました。

たくさんの出会いのなかで、いろんな考えやものの見方をおして、自分の価値観をふり返ることができ、自分自身をみつめることの大切さを実感してきました。

自分を見つめるなかで、自分が解放されていくことも実感してきました。

そして、子どもや保護者の「何に向き合うのか」、「何にこだわるのか」ということを考えてきました。それは、「どんな保育や教育をしていくのか」ということを常に問い続けることでもありました。

一人ひとりが命をもって生きていることを尊敬していくということもずっと問い続けながら、保育・教育の実践を創りだしていきましょう。子どもの姿や保護者の姿から検証をしながら。もちろん、自分の姿を振り返ることを忘れずに。

## 参加者の感想から

- ・ 人権問題をどのように保育におろしていけばよいのか、どう結びついているのか、自分自身考える部分でもあり、人権問題、差別を意識しすぎているのも差別ではないのか、もしかしたら自分自身も差別している側ではないのかなど、何が正しいのかわからなくなるところもありました。しかし、保育のなかで、原点に戻り、「命を大切にすること」、「生まれてくれたことに感謝する」、そこを忘れず、差別と向きあう前に自分自身をふり返ることを改めてしていきたいと感じました。そのなかで保育にどういかしていくのか、子どもたちとどう過ごしていくのか考えていきたいと思います。
- ・ 無意識の中にある差別にまず自分が気づくことが人権教育の第一歩なんだとあらためて考えました。単純に目に見える子どもの行動・言動だけでなく、その後ろにある子どもの思い、親の思い、そして現実を見つめること、気づくことが大切なんだと思いました。
- ・ 子どもたちに差別をしない、いけないことだと言うのはできるのですが、わかってもらいのが難しいと思いました。私の価値観、正義感がただしいのかどうかもわからないように思います。一般的な意見や考えを伝えることはできると思います。この年代の子たちに及ぼす影響というのは大きいと思います。差別とは正直関係のない、自分は差別をしないと思っているという偏見をもっている自分がいると思います。そのことに気づき、考えるきっかけにしていきたいと思います。